

文部科学省補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」

2019年度 連携型共同研究 成果報告書

研究課題名	ジェンダー平等を基軸にした大学評価のあり方についての研究—学生・院生のキャリアデザイン支援を中心に
研究代表者	西垣 順子（大阪市立大学 大学教育研究センター 准教授）
共同研究者	飯吉 弘子（大阪市立大学 大学教育研究センター 教授） 安達 智子（大阪教育大学 教育学部 准教授） 山口 真紀（神戸学院大学 全学教育推進機構 講師） 伊田 勝憲（立命館大学 教職研究科 教授）

研究成果

本研究の成果は主に次の3点である。まず8月に、ジェンダー平等と大学・大学評価に係る研究会を開催した。①米国のIR（institutional research）研究においてSTEM分野の男女平等がどのようにアプローチされているのか（西垣）、②日本のスーパーサイエンスハイスクールにおける学習動機のジェンダー差（伊田）、③日本の理系分野に重点を置いた女性研究者支援政策の問題点についての報告（山口）があり、大学評価という観点からジェンダー平等をどのように研究する可能性があるかを軸に議論が行われた。

また2月には高等教育段階でキャリアデザイン研究に係る研究会を、第26回大学教育研究セミナーとして開催し、学生が持つ職業・キャリアイメージや自己効力感のジェンダーによる違いおよびその克服を図る教育的取組についての講演（安達）とそれを受けてのコメント（飯吉）と議論を行った。

これら2つの研究会の成果として（先行研究レビューやデータ・現状の分析）、①学生と教職員双方の先入観や無意識を明らかにする（自覚する）ことが重要であること、②そのためには情報の提供のみではなくActive Learningの手法が必要・有効であり、（マイノリティ的地位にある）当事者が自分の思いや経験を語ることも重要であること、③日本における理系教育や研究者支援が、実は支援を届けられるべき人々の間に分断を作っている可能性があること等の論点が浮かび上がった。

これらの研究会に加えて、ウィスコンシン大学マディソン校への訪問調査を行い、マディソン校が「研究的アプローチ」を重視しながら、諸施策の継続的な評価と各種ワークショップの頻回の開催を通じて、大学も含めた教育機関におけるジェンダー平等や公正（equity）の追求を行ってきたプロセスについて知見を得た。具体的には、妊娠・出産に限らない様々なライフイベント（自身の病気、子どもや家族の病気や事故なども含む）に直面している多様な属性を持つ研究者（男性も含む）への支援を行い、その成果を毎年評価して公表していた。また、アンコンシャスバイアスを可視化するロールプレイングゲームを開発し、それを活用したワークショップを大学の内外で数多く開催していた。

そして、上述の2つの研究会で明らかにした①～③の事柄は、マディソン校のLEADセンターなどが、個人個人の無意識バイアスへの気づきと克服を図る受講者参加型ワークショップを多く実践し、また多様な事情を持つ研究者への支援プログラムを展開、継続的な効果検証を行うことで成果をあげてきたことと符合しており、このことは本研究の成果として重要な点と考えられる。なお、これらの研究成果の一部は、第25回大学教育研究セミナー（第1回ダイバーシティ海外研究報告会）（2019年12月26日開催）でも報告された。